

博士論文（要約）

論文題目 ベトナム北部における貿易港の考古学的研究
—ヴァンドンとフォーヒエンを中心に—

氏 名 菊池（阿部） 百里子

序章

第1節 研究の目的と方法

本研究の目的は、海域アジアで広く展開していた交易ネットワークにおける、大越国の位置づけや役割について、考古遺物として出土する交易品、特に陶磁器や銭貨の生産、流通、消費の各段階に焦点をあてて考察するものである。具体的には、大越国の貿易港遺跡であるヴァンドン（雲屯）とフォーヒエンに注目し、その考古学調査の成果によって港の成立から衰退までの歴史、および港としての構造をあきらかにする。そして、その港に運ばれた交易品の生産地の状況と、その交易品が運ばれた消費地の状況や共伴する各国の交易品を比較することで、海域アジアにおける交易ネットワークに大越国の製品が運ばれた背景や様相を考古学的に明らかにする。

大越国の交易を論じた論文は多数あるが、本研究は生産と消費をつなぐ存在としての港を軸とし、流通していた交易品から大越国の交易の様相を探る研究であることに特色がある。

本研究があつかう地域は、この大越国が支配していたベトナム北部地域とし、対象とする時代は、大越国が海域アジアの交易ネットワークに参加していた14世紀から17世紀までとする。

第2節 あつかう資料

本研究では、ベトナムや日本、インドネシアなどの流通遺跡である港跡、その港を介してつながる交易品の生産地遺跡と消費地遺跡において、出土・表採された陶磁器や銭貨資料などを研究資料とする。

第3節 研究史

ベトナムにおける陶磁器研究は、窯跡などの発掘調査が1970年代ごろからはじまり、ドイモイ政策が始まると、1990年からはチュウダウ窯などで発掘調査がベトナムと外国人研究者の共同で実施される。

日本では、ベトナム陶磁研究は戦前にはじまり、1990年代にはいると日本各地で出土した東南アジア陶磁器が集成される。ドイモイ以後は日本人研究者がベトナムの古窯跡や港の踏査を開始し、現地の窯跡と日本で出土した東南アジア陶磁器との比較や詳細な編年研究へ発展している。

ベトナムにおける銭貨研究は、外国人によって古銭学として発展する。1980年代以降は、ベトナム人による出土銭の調査報告がなされるようになり、近年の出土銭報告の増加やベトナム考古学の発展と国際化により、文字の厳密な比較や文献を駆使した銭貨研究が盛んとなっている。

2006年からは、日本人研究者グループがベトナムの一括出土銭に対する考古学的研究を開始しており、ベトナムと中国では、出土数の多い銭銘がほぼ類似していることなどが指摘されている。

第4節 研究課題

1990年代以降、ベトナムでは対外交易や国際関係といった問題への取り組みが本格化しはじめ、貿易港における考古学的研究からその貿易港の様相を考察する研究がさかんとなる。ヴァンドン地域でも遺跡踏査が本格的に実施され、港の構造や出土する陶磁器の様相を把握する調査が行われている。

2000年代以降は、英語圏の外国人研究者によって大越国の交易様相が考察され、16世紀初頭までに雲屯は港としての役割は終焉し、大越国の交易活動は衰退するとされる。そしてその衰退原因を大越国内の事情にもとめている。しかし、これらの論考は雲屯港跡の実地調査をしたうえでの結果ではない。

これまでの雲屯やフォーヒエンの研究は、港の位置や構造、成立過程と終焉時期といった港としての歴史の変遷を考察する研究に終始しており、その港を通して運ばれていた交易品たる陶磁器の様相が研究の論証に使用される例は少ない。ベトナム陶磁器の研究は、窯跡ごとの文様や製作技法の特色をあきらかにし、消費地遺跡からその製作年代の比定をおこなう研究に限定される。そして主要な消費地遺跡である日本においては、日本出土のベトナム陶磁器を集めて編年資料とする陶磁器研究はさかんだが、それが日本に運ばれてきた背景をベトナムの対外貿易政策から論じる研究はなかった。

生産と流通、そしてその先にある消費は緊密に関連しており、相互に関連づけられて研究されるべきである。しかし、ベトナム北部においてはそれが切り離され、比較検討される研究の機会がなかった。

本研究は、これまで個別に研究されてきた生産・流通・消費の各段階を、港を媒介として相互に関連づけ、その歴史的背景をベトナムの対外貿易政策から論じるものである。

本稿では、第1に雲屯の港としての構造について、第2に雲屯の港としての役割および大越国の交易活動が衰退する時期とその経過、理由について、第3に、フォーヒエンに設置されていたとするオランダ東インド会社(以下、VOCとする。)の商館の位置について、第4に17世紀末にトンキン貿易が衰退し、VOCや東インド会社(以下、EICとする。)が商館を閉鎖する経過と理由について中心に考察する。

第5節 本論文の構成

第1章 大越国における陶磁生産

本研究では、おもに港跡や消費地遺跡で出土した陶磁器を研究資料としてあつかい、ベトナム北部における陶磁器の輸出や消費の様相を論じる。そのため、本研究の前提としてベトナム北部の主要な陶磁器、とりわけ海外に運ばれた磁器製品の生産地についてまとめる。

第1節 李朝～明支配期の磁器生産地

李朝期のベトナム陶磁には、白磁や青磁、白釉褐彩製品などがある。ハノイ市内表採品に熔着痕のある資料があり、窯跡出土品とされる。蓮や竜の文様が多用され、宋代陶磁器の影響を大きくうける。

陳朝には、種類や文様、製作技法が多様化し、またハノイ一帯やナムディン、ハイズオンなど各地で、おもに白磁や青磁、褐磁、白釉褐彩、緑釉などの製品が作られた。陳朝末期には青花や鉄絵が加わる。

第2節 黎朝期の磁器生産地

陶磁器生産が発展した時代で、15世紀中頃にはその製作技術と芸術性が最高潮にたっていた。

ハイズオン省のチュウダオ窯やミーサー窯などナムサク地域において盛んな生産活動がおこなわれ、「チュウダオ陶磁」ともよばれる。16世紀の内乱や、16世紀末に大勢の陶工がバッチャンなどほかの場所に移住したため衰退したとされる。ビンザン地域でもチュウダオと類似する遺物が出土し、15世紀から17世紀まで生産が継続していた。ホップレー窯では景德鎮や福建省漳州窯の製品を模倣した碗や小碗・皿も生産している。

第3節 小結

李朝期には、ハノイ一帯で磁器生産が行われており、宮殿で使用される器が生産されていた。

陳朝期になると、ハノイ及び近郊のバッチャン、キムランのほか、副都天長府がおかれたナムディンや陳朝皇族の支配地域であるヴァンイエンで陶磁器生産が行われていた。これらの陶磁器は青磁類で内面に型押し印花文を施すものが多い。また、14世紀後半に始まる初期鉄絵・青花の生産窯でもある。この時期も、宮殿や貴族の生活で使用される器が主に生産されていた。

黎朝期になると、これまでの生産地に加え、ハイズオンでのチュウダウ陶磁の生産が盛んになる。ベトナム陶磁器の大量生産、大量輸出期を象徴する製品である。ハイズオンは、貿易港雲屯の後背地にあたり、ハイズオンにおけるその生産の隆盛には貿易港雲屯の存在も関与していた。

第2章 ヲァンドン地域における考古学調査

11世紀に李朝によって設置されたと史料に登場する貿易港雲屯について、筆者が実施した遺跡の発掘調査の成果をまとめ、大越国の流通遺跡として機能しはじめる年代と貿易港としての役割を考察するための資料を提示する。

第1節 貿易港雲屯

雲屯は、中国からベトナムへいたる航路上に位置する。そのままホン河に入り国都昇竜へいたることのできる、貿易港としてだけでなく、政治的にも重要な地点であった。この、雲屯港跡における過去の考古学調査は、ベトナム陶磁研究の一環でおこなわれてきた経緯があり、結果、雲屯港の時代ごとの中心地をさぐる研究に関心が偏っていた。そのため、港としての歴史や機能、構造、交易品の具体的な様相などをあきらかにするための考古学発掘調査はこれまでおこなわれてこなかった。

第2節 クアンニン省ヴァンドン地域

ハロン湾地域では、古くは後期新石器時代のハロン文化が栄え、北属期以降は墳墓がつくられ、漢代唐代の文物が多く流入した。筆者は雲屯港の歴史や港としての構造、交易品の様相をあきらかにすることを目的として、ハロン湾の各島で雲屯貿易港関連遺跡の踏査と発掘調査をおこなった。

12世紀以降の遺物が確認できたのはクアンラン島、ゴックヴン島、コンタイ島、コンドン島であった。

第3節 考古学調査結果

クアンラン島の調査：13世紀の陳朝から近世までの遺物が、クアンラン島コンクイ地点に分布することが確認できた。発掘調査は、3カ所でトレンチ調査を実施したが、いずれのトレンチでも遺構の検出はなく、若干の遺物が出土した。ベトナム焼締陶器鉢や壺、白磁の香炉、多数の銭貨が確認されている。また、過去には珪砂の採掘に伴い胴長のベトナム焼締陶器鉢のなかに人骨を納めた骨壺が多数確認されている。多数の銭貨はその埋葬時に、あるいは祭祀にともない供えられたものと解釈でき、コンクイ地点の砂丘は遅くとも14世紀頃から近世までの墓域であった。李朝までさかのぼるかは不明である。

カイラン地点では、16~17世紀のベトナムや中国の陶磁器が多数出土している。

コンドン島の調査：第1地区の入り江であるヴンヒュエンに遺物が集中していた。ベトナム製品では焼締陶、緑釉、黒褐釉製品、白釉搔落褐彩壺や内白外褐釉碗など陳朝期の遺物が多い。15~16世紀の青花もみられた。中国製品では青磁や白磁が確認された。

コンタイ島の調査：第3地区、第4地区ではベトナム製品が多く、第3地区での発掘調査では、第1層で15~16世紀のハイズオン窯系のベトナム青花や「繩簾」文焼締陶器が、第2層で緑釉や白磁製品が出土している。中国製品では、15~16世紀の竜泉窯系青磁や景德鎮窯系白磁、青花が出土しているが小片である。踏査では、青花のタイルを発見している。

チュアカット地点、チュオンボー地点、第5地区地点では、ベトナムの焼締陶器と中国磁器が多い。第5地区の発掘調査では、第2層から第3層にかけて、トレンチの南側から中国陶磁器の破片が折りかさなるようにして出土した。第5層は炭化物を多く含む層で、遺物も多い。遺物は熱をうけている。第6層は、炭化物と小石を多く含むみ、遺物の年代は13世紀中ごろが中心であった。

上層部で大量に出土した中国陶磁器は、13世紀末から15世紀を代表する、竜泉窯系の青磁碗や瓶、香炉、枢府手の白磁、褐釉四耳壺といった中国の貿易陶磁器である。なかでも、14世紀後半の元末明初の製品が多い。これらの陶磁器は、優品として名高い新安海底遺物、首里城跡、トロウラン遺跡などの陶磁器に類例をみることができる。下層部では、ベトナムの白釉搔落褐彩壺のほか鉄絵碗など陳朝の製品が、中国青磁では竜泉窯系の13世紀中頃から後半の製品があり、元寇の遺跡である高島海底遺跡からも同様の製品が出土している。青花では、元の14世紀後半の景德鎮系製品が確認されている。

第4節 小結

ゴックヴン島やコンタイ島、コンドン島には、陳朝から黎朝前期の遺物が集中し、この一帯が港であったと考えられる。各地点の遺物分布状況から2つの様相が指摘できる。

ひとつは、13~15世紀頃の中国貿易陶磁器を特徴とする遺物群の分布である。元末から明初にかけて生産され、さかんに海外に輸出された貿易陶磁器であり、世界各地で出土している。コンタイ島第5地区、チュアカット地点、チュオンボー地点にかけて確認でき、この一帯は中国陶磁器を載せた貿易船の停泊地であり、雲屯までの航路で破損した陶磁器を荷下ろしのさいに破棄した場所と推定できる。

もうひとつは、陳朝から黎朝前期である13~15世紀の遺物群で、ベトナム青磁や青花の碗や蓋、緑釉などの陶磁器を特徴とする。コンタイ島の第3~4地区にかけて確認でき、この一帯は、国内で生産、集荷された陶磁器を小舟で陸から島に運び、貿易船に積み替えるために荷下ろした停泊地であり、小舟で運搬している最中に破損した陶磁器を廃棄した場所と推定できる。

カイラン地点では、16世紀後半から17世紀の中国やベトナムの貿易陶磁器である青花類が多数確認できる。中国製品では景德鎮窯系で見込みがせりあがるタイプの碗が、ベトナム製品では印判手菊花文皿や焼締鉢形容器が多い。これらの遺物群はベトナム北部の他地点の港跡ではまだ確認されていない。近世の港と位置づけられ、雲屯が17世紀においても港であったことを証明している。

第3章 フォーヒエンの考古学調査

黎朝後期の鄭氏政権下には、フォーヒエン(現在のフンイエン市)に外国人の貿易拠点がおかれており、この地における発掘調査の成果をまとめ、都市形成史と貿易港としての役割を考察する。

第1節 フンイエンの概要

ハノイからホン河を下ること 50km、タイビン川と分岐点に位置するフンイエン市には華人街フォーヒエンがある。1637年にVOC商館が建設されたのはフォーヒエンであるとされてきたが、近年は、ケーチョ(ハノイ)であったともされる。EICは、1672年にフォーヒエンに商館を設置したが、その後ケーチョに移転した。フォーヒエンには撤退するときまで倉庫あるいは事務所をおいていた。

第2節 フォーヒエンにおける考古学調査の概要

ホンチャウ地区：天后宮の周辺の4か所で発掘調査を実施。地表面下100cmから水が湧きはじめた。

ホンチャウⅠでは、地表面下100cmあたりから17世紀後半の製品である中国・印花文青花碗やベトナム・シックダン窯の鉄絵印判手花文碗がまとまって出土した。

ホンチャウⅡでは、地表面下60cmのあたりから、溝様遺構を確認し、17～18世紀の中国やベトナム陶磁器が出土した。中国陶磁は漳州窯系の碗皿、徳化窯系の型造りの碗、ベトナム陶磁は、17世紀後半の印判手菊花皿である。この遺構下からはそれまで大量にあった徳化窯系の型造り碗が出土しなくなる。

ホンチャウⅢでは20cm前後の厚みがある粉碎した煉瓦の層があり、その下からは割れたり、歪んだりした陶器が出土した。この遺構は窯跡関連遺構であり、物原の上に窯を取り壊した時の窯体の破片を投棄したと考えられる。この物原遺構の下からは、17世紀の中国青花やベトナム陶磁器が出土しており、地表面下180cmのところベトナム青花の花文碗が出土している。

ホンチャウⅣでは遺物もほとんどなく、池に近かったせいかすぐに水が湧きはじめた。

ホンチャウⅤでは地表面直下から多数の中国青花やベトナム陶磁器が出土した。地表面下130cmでレンガを縦に一直列並べた遺構を検出した。このレンガ遺構の下層では遺物はなかった。

クアンチュン地区：チュンチャック通り北側で発掘調査を実施。地表面下250cmから水が湧きはじめた。

チュンチャックⅠでは、上層部に20世紀の土坑があり、その下層の地表面下230cmで徳化窯系の型造り青花碗や粗製のベトナム白磁などが出土した。それ以下は砂層になり、遺物は含まれなかった。

チュンチャックⅡでは、地表面下130cmで薄い炭化物層を検出し、この層の下では17世紀末頃の中国やベトナムの陶磁器、清朝銭が含まれていた。また、地表面下230cmおよび250cmで日本の肥前磁器が出土している。これ以下は砂層になり、地表面下300cmまで掘ったが遺物は含まれなかった。

第3節 出土遺物

中国陶磁は16世紀末から17世紀前半の漳州窯系青花や18世紀の徳化窯系の型造り青花小碗が出土した。内面に褐釉を施した内洪の鍋や急須の蓋など華人の飲食文化のなかで消費された製品もみられる。ベトナム陶磁は17世紀代の青花碗や青花・鉄絵印判手菊花文碗、浅く小ぶりの粗製の白磁皿、窯跡遺構にともなう未成品などが出土した。このほかに日本の肥前磁器や清朝銭が出土した。

第4節 小結

外国商人の商館らしき建物の痕跡を確認することはできなかった。17世紀前半以前にさかのぼる遺物では、陳朝の白磁や16世紀末から17世紀前半の漳州窯系青花が数点出土しているが、いずれも17世紀後半以降の遺物と相伴している。肥前磁器は17世紀中頃の製品だが、康熙年間に生産された漳州窯系の青花と相伴して、あるいはそれより上の層から出土している。そのため、1680年代以降、ケーチョから移住してきた中国人が持ちこんだものと考えられる。

フォーヒエンでは、17世紀後半から18世紀代を代表する貿易陶磁群が出土しており、17世紀後半以降にさかんな商業活動を展開していたことはあきらかであるが、17世紀前半は華人が集住する一地方都市であり、さかんな商業活動があったとは考えられない。1637年設置のVOC商館の場所はフォーヒエンではなかったと結論づけられる。

第4章 李朝から陳朝の交易様相

第1節 李朝期の陶磁器—昇竜皇城遺跡出土品から—

昇竜皇城遺跡は、9世紀から20世紀にいたるまでの都城遺跡である。2002年、政治の中心地バーディン地区ホアンジウ18番地で発掘調査が開始され、7世紀～20世紀の大規模な建築遺構と膨大な量の遺物が出土した。7～9世紀の青灰釉碗皿や灰釉壺、李朝の陶磁器では白磁、白釉褐彩磁が、中国陶磁では白磁や青白磁、越州窯青磁、長沙窯灰白釉水注など唐・宋代の陶磁器や、イスラーム陶器が出土した。

第2節 李朝期の交易活動

李朝期の貿易港：ヴァンドン地域の考古学調査では、主要な遺物は元から明代のものであり、1149年に雲屯が設置されたかは確認できない。しかし昇竜皇城遺跡の唐代・宋代の陶磁器やイスラーム陶器などから考察すれば、李朝期にはすでにベトナムの地で陸や海を通じた交易活動がおこなわれていた可能性もあり、港の存在も肯定できる。

チャンパーおよびカンボジアと大越が接する地点としてゲアンがあげられ、東北タイやラオスから南シナ海交易にアプローチするルートが存在からもゲアンの重要性が指摘されているが、ゲアンにおける考古学調査では、昇竜皇城遺跡で出土するような唐代、宋代の陶磁器は出土していない。

「交趾洋」の交易：李朝期のベトナム北部を介した交易には金銀器や馴象、真珠、銅銭などがあげられ、中国とベトナムの間では双方向の商品の往来があったことが指摘され、海路では「交趾洋」の交易ルートで運ばれていた。このころの交易形態が役人による管理貿易であったかは定かではないが、ヴァンドン地域には古くから人が居住し、国際貿易港としての素地を有していたことが指摘できる。

李朝期の陶磁器が出土する消費地遺跡は、ベトナム国内では昇竜皇城遺跡にほぼ限られ、昇竜皇城の建築部材や、宮殿内での生活に用いられる陶磁を生産していた。そのため、ベトナム北部の港遺跡におけるベトナム陶磁器出土の有無は、李朝期の港の存在を論じるさいの資料とはならない。

ベトナム以外の地ではジャカルタやフィリピンで白磁製品が確認されているが、僅かである。中国陶磁器のように、一定規模で輸出されたのではなく、偶発的に運ばれたものであろう。

第3節 陳朝の陶磁器

宮殿で使用された陳朝の陶磁器：昇竜皇城遺跡では、陳朝期の陶磁器が多数出土している。ベトナム製品では、青磁や白磁、褐磁、白釉褐彩磁、初期鉄絵など、中国製品では、元の青磁や白磁がみられる。

ナムディンでは、天長府の船着場、バイハラン遺跡で多数の陶磁器が発見されている。ベトナム陶磁器は13世紀初頭から15世紀初頭のもものが中心で、なかでも高台内に「天長府製」と鉄鏝で書かれた青磁碗出土している。龍泉窯系の青磁花唐草文鉢を模倣した上質な陶磁器も多数出土している。

ティンホアの胡朝城では、ベトナムの緑釉や褐釉、白磁、中国の青磁などが出土している。

少数民族墓出土の陶磁器：ホアビン省の歴代のムオン民族領主の埋葬地であるドンテック遺跡で多くの陶磁器が確認されている。M17号墓では、龍泉窯系の青磁蓮弁碗のほか、ベトナム焼締陶器や外褐内白釉碗、白磁製品、緑釉製品、褐釉製品がある。いずれも14世紀代の製品である。

陳朝の陶磁器生産：ベトナム国内の陳朝期の遺跡では、多くの陳朝陶磁器が出土しており、この時期、陶磁器生産がかなり発達し、大量生産が可能となっていたことをしめしている。陳朝以降の製品には、た見込み部分の胎土目の痕跡がみられるようになり、このようなスタッキングによる窯詰め技法の変化と発展は、陶磁器の大量生産をしめしており、それが14世紀頃から普及している。

第4節 輸出された陳朝陶磁器

日本出土の陳朝・胡朝陶磁器—沖繩、九州の遺跡を中心に—：日本出土のベトナム陶磁のうち、初期の製品は陳朝から胡朝の陶磁器である。初期青花・鉄絵とよばれる、元青花を模した、略筆による形式化した草花文を描く一群が、首里城二階殿跡や大宰府遺跡の14世紀中頃の遺構から出土している。長崎では、対馬の水崎(仮宿)遺跡で1419年の応永の外寇に推定される焼土層からベトナムの初期青花・鉄絵碗・壺・合子、青磁碗、白磁碗、褐釉碗などが多数確認されている。

インドネシア出土の陳朝・胡朝陶磁器—マジャパイト王国の遺跡を中心に—：インドネシアのマジャパ

イト王朝の都がおかれた東ジャワにあるトロウラン遺跡で中国やベトナム、タイの陶磁器が多数出土している。遺物の中心となるのは13世紀末から15世紀の陶磁器である。最も多かったのが15世紀の竜泉窯の青磁で酒海壺や蓮弁の碗や鉢、盤、瓶など、大型の高級な青磁がめだつ。

ベトナムの陳朝期の製品では、初期青花・鉄絵が数十点発見されている。また、胡朝城で出土しているような外面に蓮弁文を施したり、見込み部分を蛇の目釉剥ぎにする緑釉の碗が多数出土している。

第5節 小結 —陳朝期・ベトナム陶磁輸出初期段階の交易—

陳朝期の貿易港：陳朝期は、中国では南宋から元、そして明初の時期にあたる。ヴァンドン地域の考古学調査では、コンタイ島第5地点で13～15世紀を代表する中国の貿易陶磁器が多数出土、港としての存在が確認できる。これらの陶磁器は、元寇において雲屯にいた商人が運んでいた可能性があり、元軍と通じたオルトク商人の存在が指摘できる。

ヴァンドン地域の考古学調査では、コンタイ島第5地区でインドネシアのトロウラン遺跡などアジアの港市各地で発見されている13世紀末から15世紀の竜泉窯や景德鎮窯の上質な貿易陶磁器群であり、そのモデルは1323年に沈んだとされる沈没船、新安海底遺物にもとめられる。コンタイ島で出土するような上質の陶磁器が出土するのは、ベトナム北部ではヴァンドン地域と国都昇竜皇城遺跡、そして少数民族の領主墓であるドンテック遺跡のみである。少数民族の領主墓は内陸部にあり、陳朝皇帝からの下賜品と考えられる。陳朝朝廷にもたらされる商品が運ばれた港と位置づけることができる。ただし、昇竜皇城遺跡から出土している陳朝期の中国陶磁器はわずかであり、雲屯港にもたらされた中国陶磁器は、大越国むけの商品ではなく、出会いや中継貿易によってその大部分がマジヤパイトなど海域アジアへ分散していったと考えられる。

大越国の明支配期(1406～1428年)には、雲屯に市舶司や抽分場が設置されており、爪哇からの船が明支配期にもベトナムの地に来航していた可能性が指摘できる。

ゲアン沿岸部の一帯では、中国青磁や陳朝期の陶磁器が多数確認されている。また、近年ラオスでは、多くのベトナム陶磁器が出土しており、ベトナム北中部にも内陸部ラオスとの交易の窓口としての港の存在が確認できる。ハイズオンあるいはナムディンなどで生産されたが陶磁器がダイ川を下り海にで、そのまま沿岸を南下してゲアンまで陶磁器を運び、その後陸路で運ばれたルートが指摘できる。

陳朝期の交易活動：陳朝期には陶磁器の大量生産もはじまり、国内の需要以外に、琉球や東南アジア地域へも運ばれるようになった。陳朝期に初期青花・鉄絵を生産していた窯跡は、昇竜城とハノイ近郊のキムラン、そしてハイズオンのヴァンイエンである。陳朝期の陶磁器生産地ヴァンイエンは、陳の王族の南冊勢力圏内に位置し、陳の王族の田庄がおかれていたこと、そして雲屯も南冊勢力圏内に位置していたことから、陳朝王族勢力のもとで生産され、雲屯から輸出された商品であったと考えられる。ヴァンドン遺跡コンタイ島第5地点で出土する青磁はその交易のなかで運ばれたと位置づけられる。雲屯は陳朝の王族の経済活動の中で貿易港として機能していた。日本へのベトナム陶磁器の流入は、14世紀末から15世紀初頭の活発な壹岐・対馬の倭寇や中国人商人の活動を介した南冊勢力による雲屯を通じた交易の商品であったといえる。

雲屯港跡であるコンタイ島第5地区や首里城、トロウラン遺跡で出土する中国陶磁器や陳朝陶磁器には共通性があり、同時期に中国製品が各地に流入していた。マジヤパイトや琉球、大越を含む海域アジアの商による、雲屯を出会いの場とした交易のなかでベトナム陶磁器も運ばれたと考えられる。

第5章 黎朝前期の交易様相

第1節 黎朝前期の陶磁器

ベトナム国内で流通していた黎朝前期の陶磁器：黎朝前期のベトナム陶磁器が多数出土する遺跡は、昇竜皇城遺跡である。青花では、明の青花をまねて外面と見込みに5爪の竜文を描き、口縁部や体部に連続花文を巡らせる碗などがある。昇竜城で使用する陶磁器も生産され、官窯があった。

また、15世紀中頃になるとベトナム国内外において、陳朝末期までとは全く異なる、薄胎白磁碗が生産されるようになる。この白磁は内面に型押しによる竜文などの印花文を施した碗や皿、小坏、蓋などがある。見込み部に「官」の字を印花にした製品もみられ、官窯の製品である。

これら青花や白磁は非常に上質な製品であり、ベトナム北部の消費地遺跡では昇竜皇城と黎朝の祖廟藍京遺跡でしか出土していない。昇竜城で生産されたものと考えられる。

黎朝前期の陶磁器生産：上述の薄胎白磁は、ベトナムでは特別な遺跡でしか出土していない。海外ではトロウランや沖縄の首里城御内原北地区、今帰仁城跡でも発見されている。

首里城御内原北地区では1453年の造成土中から薄胎白磁碗が出土しており、1450年代初頭には生産され、輸出されていたことがわかる。このような、15世紀中ごろの品質向上と大量生産の背景に、中国からの技術の伝来あるいは陶工の移入が想定できる。永楽期のベトナム侵攻にさいし、ベトナムへは多くの明人が流入しており、景德鎮から、あるいは雲南から陶工がよばれ、食器が大量生産されていた可能性が指摘できる。当時の南冊には、明の統治政策をうけ入れやすい状況があり、ハイズオンへの窯業技術の流入も不可能ではなからう。

第2節 輸出された黎朝前期の陶磁器

日本出土黎朝前期の陶磁器：黎朝前期の盛期の陶磁器は、沖縄、特に首里城などグスク跡に集中し、琉球王国の朝貢貿易や中継貿易によって運ばれたものといえる。

ラオス出土の黎朝前期の陶磁器：ヴィエンチャンの旧王都城壁に囲繞されたラーンサーン期の都城遺跡において、中国やタイ、ベトナムの陶磁器が多数出土している。ベトナム陶磁器は、陳朝期の青磁や白磁、白釉搔落褐彩製品が含まれるが、その大半は15世紀の黎朝の青花や五彩であった。ラオスで出土するベトナム陶磁器は、大越国の西方地域との関係や支配を考えるうえで興味深い資料である。

インドネシア出土の黎朝前期の陶磁器：トロウラン遺跡では陳朝のベトナム陶磁器に引きつづき、黎朝前期の青花や五彩、白磁が出土しており、その量は陳朝の陶磁器をはるかに上まわる。黎朝期のベトナム陶磁器は、15世紀後半の沈没船資料として知られるクーラオチャム沖沈没船引き揚げ遺物と同時期のベトナム陶磁器群が多くみられる。そしてこの一群が、トロウランのベトナム陶磁器のなかでも最もあたるらしいグループである。永楽期の威信財的な中国官窯の製品を補完するような状況で存在している。

またトロウラン遺跡やデマクモスクにおいて多数のベトナム青花のタイルが発見されており、マジヤパイトからの注文生産品とされる。このような青花のタイルは、昇竜皇城で1点、雲屯港跡であるコンタイ島で1点発見されているのみで、バッチャン、ハイズオン省内でも発見されていないため、生産窯ははっきりとしない。ベトナム青花タイルは、ベトナム国内用の製品が外国にも輸出されたのではなく、マジヤパイト王国の注文によって生産された輸出用製品で、雲屯から輸出されていた。

フィリピン出土の黎朝前期の陶磁器：ベトナム陶磁は、カラタガン遺跡群やブンジャオ岩陰遺跡、リンパバ洞穴遺跡など、岩陰や洞窟など特定の遺跡から、中国陶磁器などとともに出土している。しかし、その量は中国陶磁器やタイ陶磁器にくらべるとわずかである。ベトナム北部地域との直接の往来ではなく、インドネシアなど海域アジアの西側を経由した交易により運ばれたと考えられる。

沈没船から引き揚げられた黎朝前期の陶磁器：ベトナム中部海域のクーラオチャム島沖で発見された沈没船からは、積み荷である多数のベトナム青花が引き揚げられた。ベトナム陶磁としての独自性が確立し、最盛期をむかえる段階の一群である。多くは青花と五彩で、ほかに青磁、白磁、焼き締め長胴壺などがある。このほかにタイや少量であるが中国の青花も含まれていた。これらの陶磁器の年代は、15世紀後半から16世紀前半までの幅で考えられており、その年代の確定が重要な課題となっている。

フィリピンのパンダナン島沖沈没船では、ベトナム北部や中部のゴサイン窯の青磁皿や褐釉の大壺などの陶磁器が発見され、船の沈没年代は15世紀中頃とされる。レナ・ショール沈没船では中国陶磁器、ベトナム陶磁器、タイ陶磁器、ミャンマー陶磁器などが発見されている。ベトナム北部の青花のほかに、ベトナム中部の褐釉の四耳壺が多数発見された。15世紀末から16世紀前半の製品と考えられる。

出土遺物がかたる交易：黎朝前期の盛んな陶磁器輸出開始の時期は、廃棄の年代があきらかな考古遺物から考察することができ、ベトナム北部産の陶磁器は、1440年代にはある程度の規模で輸出を開始したと考えられる。フィリピンでは、ベトナム陶磁器は出土するがインドネシアの出土例にくらべるとわずかである。ベトナム北部地域との直接の往来ではなく、インドネシアなど海域アジアの西側を経由した交易により運ばれたと考えられる。

第3節 小結 —黎朝前期・ベトナム陶磁輸出の最盛期の交易—

黎朝前期の貿易港：クーラオチャム沖沈没船では実に24万点以上のベトナム陶磁器が引き揚げられ、そのほとんどがハイズオン諸窯青花と色絵製品であった。マジヤパイトは、大越に陶磁器を注文生産させていた。このような交易にあつて、雲屯港は、もはや陳朝期のような中継貿易や出会い貿易の場ではない。大越国の商品を輸出するための玄関として機能していた。

黎朝前期の陶磁器輸出：黎朝前期には、ベトナム国内のみならず、海外にもさかんに陶磁器が輸出された。官窯の製品や注文生産による輸出もこの時に開始されている。黎朝は、占城や暹羅、爪哇などからさかんな朝貢をうけていたが、その回賜品の一つとしてベトナム陶磁器も贈られていたのだろう。中国との朝貢貿易の制限があるなかで、中国製品を入手することができたベトナムの地において、記録にあらわれないような東南アジア諸国と貿易が頻繁におこなわれていたのだろう。アジア海域を縦横無尽に活躍する中国やチャンパー、ムスリム、琉球などの商船が、その交易のなかで雲屯港から各地にベトナム陶磁を運んだと考えられる。

1459年以降、明朝は沿岸部の混乱を取り締まる能力を喪失しており、同時に「爪哇」の明への朝貢も終わっており、1460年代にひとつの区切りがあったことはたしかであろう。

第6章 黎朝後期の陶磁輸出と銭貨

第1節 黎朝後期の陶磁器

ハノイに流通していた陶磁器：昇竜皇城遺跡では、黎朝前期にみるような型物や瓶、大型の壺などは姿をけし、中国製品でもベトナム製品でも碗や皿といった小型の食器が中心となっていく。ベトナム青花では、中国陶磁器の文様を模写した外面や見込みに竜を描く碗が多数出土するが、描き方は稚拙で、官窯の物とは思えない粗雑な作りである。黎朝後期には竜の文様の製品はハイズオンのホップレー窯でも作られようになっており、ベトナムでも竜文の使用に規制がなくなっていたようだ。

中国青花は、竜や鳳凰を青花で描く明末の漳州窯系鉢や景德鎮碗が出土している。日本の肥前染付では荒磯文碗のほかに、日の字鳳凰文皿も出土している。

藍京遺跡出土の陶磁器：中国製品では青磁や青花がみられる。青磁は、福建や広東産、青花は漳州窯系の折縁皿が多く、16世紀後半～17世紀初頭の製品である。日本の肥前磁器も数点出土している。

ドンテック遺跡出土の陶磁器：ムオン民族領主の埋葬地で、墓碑銘を刻む立石から埋葬年月日や埋葬者の名前がわかる。各墓からは、16世紀後半から17世紀代の中国や日本の陶磁器が多数出土している。

第2節 黎朝後期の陶磁器輸出

日本出土の黎朝後期の陶磁器：黎朝前期には、沖縄を中心に出土していたが、莫朝以降では出土しなくなり、その分布は九州、関西そして関東へ移っていく。白磁、青花、鉄絵、焼締陶器のほかに、「安南」や「南蛮」とよばれる茶道具があり、その形態的特徴から、日本からの注文品とされる。

長崎では旧市内の屋敷、町屋跡で青花や青花・鉄絵、焼締陶器の瓶や鉢がセットになって出土しているが、出島の和蘭商館跡や唐人屋敷跡、新地唐人荷蔵跡では長胴焼締瓶のみが、教会、長崎代官所跡では中部産四耳壺が出土しており、外国人にかかわる遺跡では青花や青花・鉄絵は出土しないことがわかる。このことは、ベトナム青花や青花・鉄絵は、日本人の生活文化のなかで消費されていたことを意味する。堺環濠都市遺跡では、茶室関連遺構からベトナム陶磁が出土する事例が多い。

また、17世紀中期以降の遺跡では青花・鉄絵菊花印判手深皿が出土し、このころまでベトナム陶磁の輸出が継続していたことがわかる。ベトナム陶磁をはじめ東南アジア陶磁は、長崎でも大阪でも17世紀末以降の遺跡では出土が著しく減少し、江戸遺跡では大名や武家屋敷において茶陶として伝世していく。このことはベトナムから日本への陶磁輸出が17世紀後半で終焉していることをしめしている。

東南アジア出土の黎朝後期の陶磁器：インドネシアで青花・鉄絵菊花印判手深皿が多数確認されている。

黎朝後期の陶磁器生産と流通：フォーヒエンや北部の各地の遺跡では、白磁粗製碗や皿が出土しており、ベトナム北部で一般的に使用されていた器種と思われる。また、フォーヒエンや日本、インドネシア、ラオス、カンボジアなどの各地では、青花・鉄絵菊花印判手深皿が出土している。ハイズオン省のホップレー窯跡で類例が出土しており、この一帯で生産されていたことがわかる。

ドンテック遺跡では漳州窯や景德鎮窯製品、肥前磁器など輸入品が多数出土しているが、日本や東南アジアに輸出していたような粗製のベトナム陶磁器はほとんど出土しない。黎朝後期には在地の陶磁器と輸入陶磁器のあいだに使いわけがあり、優品であろうと粗製品であろうと、特権階級が優先的に入手することができた輸入陶磁器は、めずらしいものとして王城で使用され、下賜品に使われたのだろう。

第3節 ベトナム北部における銭貨の使用

一括出土銭の調査：ベトナム北部における一括出土銭は、中国との国境やホン河流域、北部から中部にかけての沿岸部に分布がひろがる。北宋銭が主体となる15世紀前半以前は、北部に多く分布がみとめられる。15世紀中頃から17世紀になると、分布は中南部にもひろがり、銭貨の使用が地方にひろがっていることがわかる。18世紀から19世紀には個体数がふえるとともに、南部へも分布がひろがっていく傾向がわかる。

日本人研究者グループによるベトナムの一括出土銭の考古学的研究の調査成果について、埋められた年代が古い順に、報告書に基づいて概要をまとめる。

N2、N4資料：陳朝末期に埋められた資料で、北宋の制銭のみでベトナムの銭貨はほとんどなかった。

N6、N5資料：黎朝前期に埋められた資料で、粗悪な銭や一見して私鑄銭とわかるほど小型で薄い銭貨の一群が含まれていた。

N3資料：18世紀に埋められた資料で、北宋や黎朝前期の制銭の銭銘の一部を別の字に置き換えている銭の一群が含まれる。

N1資料：阮朝期に埋められた資料で、80%が黎朝後期の景興銭であった。

陳朝期から明支配期の銭貨：中国からの銭貨流出の面期は13世紀にあり、以降明代にかけてベトナムへも中国銭が流入していたと考えられる。

黎朝前期から莫朝期の銭貨：黎朝初期には、私蔵の禁止、陳朝期以上の短陌が推進、あらたな銭貨の鑄造など、ベトナム国内における銭貨流通を一定量維持しようとする施策が出される。胡朝の紙幣の発行や明支配期における銭貨の持ちだしによる銭貨不足が考えられる。ところが1486年の撰銭令は、銅合金銭であればうけ取りを拒否してはならないとする、使用できる銭貨の基準を示したもので、鉛などの粗悪な銭貨を排除する令である。これらの撰銭令は、どのような銭貨でも流通させようとしていた15世紀前半の撰銭令とは性格が異なる。聖宗帝は良質の銭貨を発行しており、銭貨の流通量が増したベトナム国内において、私鑄銭と上質な制銭が混在し、混沌とした銭貨の流通状況がよみとれる。

また、北宋や黎朝前期の制銭の銭銘の一部を別の字に置き換えている私鑄銭の一群が確認されており、15～16世紀の私鑄銭と想定できる。撰銭の禁令は1497年以降、1658年までだされておらず、16世紀の私鑄が横行していた状況を見ると、低質な銭貨の使用に制約がなかったと解釈できる。

黎朝後期の銭貨の使用：17世紀前半には鄭氏は制銭の鑄造をおこなっていない。内戦にとまなう武器の製作に銅が使われ、銭貨にまで銅がまわらなかったためであろう。地域通貨としての小型銭が存在し、大型貨幣と小型貨幣の貨幣交換レートが決められ、その利用における階層化がベトナム北部では17世紀初頭にははじまっていたことがわかる。17世紀には、様々な勢力の鑄造した銭貨がベトナムで流通しており、それが撰銭の禁令を招いていたと考えられる。

第4節 小結 ー輸入品からみた17世紀の交易ー

黎朝後期の貿易港：ベトナム北部では、昇竜皇城遺跡やチャンティエン遺跡など、首都ハノイ一帯や藍京遺跡、ドンテック遺跡などの消費地遺跡において、16世紀末から17世紀前半の中国の代表的な貿易陶磁の一群が多数出土している。そのため、中国から陶磁器を輸入するための港の存在が想定できる。

黎朝後期である16世紀から18世紀の遺物は雲屯港跡であるクアンラン島カイラン地点に分布している。中国やベトナムの貿易陶磁器である青花類が多数確認できることから、中国人商人との交易の場として存在していたと考えられる。

朱印船貿易時代の交易様相：長崎の金屋町遺跡では、1571年の町建てから17世紀初頭の遺構でベトナム北部産の「安南染付」に分類される蜻蛉文碗や千鳥文菊形皿が出土している。徳川幕府による朱印船貿易が開始されるころすでに、日本からベトナムに対し陶磁器の注文がおこなわれ、ベトナムと直接貿易

を開始していたことを実証している。茶陶のなかに「交趾香合」と呼ばれる福建省漳州窯の陶磁器がある。「交趾」のながついたのは、このやきものがベトナムからもたらされたためであり、16世紀後半に、ベトナムを経由した中国陶磁器の日本への流入が確認できる。このような流れの中で、ベトナム北部において日本むけの陶磁器が生産され日本に輸出された。また、漳州窯の陶磁器がドンテック遺跡で多数出土していることも、ベトナム北部と漳州との交易の道が存在していたことをあらわしている。

ヨーロッパ商人の撤退：トンキン貿易にのりだした VOC は 1637 年に、EIC は、1672 商館を建設するが、17 世紀末までに撤退するが、それは中国商品輸出の回復によるトンキン貿易の不調のためと考えられている。この貿易の不調の理由として、1780 年ごろには、銭貨と武器という外国貿易の動機がなくなり、外国人に対する警戒心から、鄭氏政権は消極的な対外政策にのりだしたことがあげられる。ベトナム北部鄭氏政権の対外貿易の動機は銭貨不足と武器の獲得にあった。17 世紀後半にはある程度の量の銅が日本から、あるいは中国南部地域やマカオからベトナムに流入しており、このことは一括出土銭の成果からもわかる。1680 年代以降には鄭氏政権下に銭貨が十分供給されていたと考えられる。鄭氏政権下での外国人との商業活動は王権や役人が関与することで成立していた。ゆえに、これらの支配階級が外国との商業に消極的となることは、外国貿易の不振と直結していたと考えられる。

また、17 世紀後半、清の支配からのがれた中国人が相ついでベトナム南部に入植し、ベトナム中部から南部ではさかんな交易活動が展開される。ベトナムの交易の勢力分布は、明らかに南に移っていった。

終章

1. 雲屯港の構造

考古学成果を総括すると、雲屯は 13 世紀中頃には港として存在していたことが確認できる。陳朝期から黎朝期の生産地として昇竜城を含むハノイ一帯、ナムディン、ハイズオンがある。そこから河川を用いて沿岸部まで商品を運び、湾に出て、コンタイ島第 3 地点まで商品を運び、川船から降ろして第 5 地点の外国船に積み込むという陶磁器輸出までの流れが想定できる。

2. 中継貿易の場としての雲屯

陳朝期には、陳朝王族の経済活動の一環として雲屯での交易活動が展開されていた。ヴァンドン出土陶磁器の様相が、首里城やトロウラン遺跡と共通する。同時期に中国製品が各地に流入しており、14 世紀末段階では史料にあらわれないような、東南アジア各国との出会い貿易が雲屯でおこなわれ、そのなかでベトナム陶磁器も運ばれたことが考古学調査の成果から指摘できる。

3. 黎朝前期の雲屯港の役割

黎朝期のベトナムの陶磁器は陳朝期とは大きく様相が異なり、高品質な青花が昇竜皇城やチュウダウ、バッチャンで大量に生産され、注文生産による輸出もこのときにはじまっている。また、品質の向上には、明支配期の陶工、あるいは技術の移入を想定できる。

黎朝はその初期の段階から管理貿易による海禁政策をとっており、このような交易にあつて、雲屯は黎朝朝廷が支配し、管理された大越国の玄関として機能していた。

4. 莫朝期の内戦と陶磁器生産

ヴァンドン地域の考古学調査では、16 世紀後半から 17 世紀の貿易陶磁器群が確認されており、雲屯が 16 世紀においても港であったことがわかる。また、これらの景德鎮窯系の青花を模倣した青花がハイズオンでは生産されており、陶磁器生産は継続されていた。

5. 外国商人の活動と黎朝の対外国人政策

徳川幕府による朱印船貿易の開始以前から、日本からベトナムに対し陶磁器の注文がおこなわれ、この陶磁器輸出は 17 世紀後半まで続いていた。17 世紀代には日本や中国から多くの銅や銭貨がベトナムに輸出され、トンキンでは様々な銭貨が流通していた。鄭氏政権が外国との商取引で海域アジアからえていた商品は、武器と銭貨であったが、1680 年頃には銅がベトナム北部で充足してくることが一括出土銭の調査からわかる。これにより、鄭氏政権が外国と貿易する動機がなくなる。中国人はフォーヒエンに移住させられ、17 世紀末以降フォーヒエンが商業の中心地として栄えるようになったが、それは、鄭氏政権の消極的な対外国人政策のあらわれであり、その時期は、トンキン貿易減退期と合致している。

6. おわりに